教育プログラム　奈良女子大学

日時：2014年12月22日（月）9:00〜10:30
場所：奈良女子大学　文学系S棟2階　S235教室
演題：「Making a Memory　記憶をのこすということ」
講師：リティー・パン（映画監督）

私は子供のころ、父のように教員になりたいと思っていました。しかし、カンボジアでは20年ほど内戦が続き、クメール・ルージュが内戦に勝って政権を握ると、ジェノサイドという大虐殺を行いました。当時約750万人のカンボジア人のうち170万人が殺されたのです。

なぜ教師の夢を諦めて、映画製作の道に入ったかというと、ジェノサイドの記憶を残すためです。大虐殺という痛ましい出来事を語るのは難しいことですが、多くの人が殺され、彼らの愛情が破壊されたのです。亡くなった方にはそれぞれ顔があり、名前があるわけで、彼らが忘れられてしまうのは私にとって耐え難いことなのです。

ジェノサイドは世界共通の問題です。歴史を理解しなければ、私たちはまた同じ間違いを繰り返すでしょう。記憶の作業というのは非常に大切であり、記憶を残す作業をしない民族は、未来にも同じような悲惨なことが待っているでしょう。ジェノサイドは非人道的な行為ですが、残念ながらわれわれの歴史であり、それを直視しなければなりません。次の世代に同じような体験をさせないために、暗い過去に直面しなければならないのです。人生や死について語るのは非常に複雑で、難しいことです。ましてや、大虐殺が関わってくるとなおさらです。

では、どう表現するか。私にとってイマージュ（画像）をどのように作っていくかが問題になりました。私が映画にしようと思うのは、言葉では語れないことなのです。「S21　クメール・ルージュの虐殺者たち」を作ろうとしたとき、虐殺のことを思い出したくない人もいるという問題に直面しました。死者を映像化するのは非常に危険なことであり、撮影する際には、対象と対等な立場にあるような距離の取り方をしました。このようなおぞましい大虐殺の映画を撮る意味があるのかと聞かれれば、私は「ある」と答えます。私は家族や友人、愛する人々を失いました。それでも、私は生きていかなければならないし、そして、「よく生きる」ことが必要なのです。この「S21」という映画を作ることで、人間が持っている、美しいこと、強いこと、素晴らしいことを映像にしたいと思いました。

ですから、私にとって創作することが非常に重要なのです。創作するということは、全体主義に抵抗することです。人が愛すること、分かち合うこと、コミュニケーションを取ること、創造することは、全体主義が壊せなかったものであり、私は虐殺を逃れた人間として、証言していくことが大事なのです。

私はカンボジアに「ボファナ視聴覚資産センター」をつくりました。大虐殺に限らず、カンボジアの歴史に関わる全てのオーディオビジュアルの資料を集め、誰でもアクセスできるようにした施設です。このセンターは、虐殺の犠牲となった若い女性の名前を冠しています。私はボファナが殺された20年後、S21収容所を訪れ、夫への愛を貫き通した彼女の人間としての尊厳性を伝えるメッセージを映画という形にしようと決めました。映画人として、野蛮な残虐行為に耐えたボファナの記憶をどのように伝えられるかを考えたわけです。映画人は多くの人と出会い、触れ合うなかでその歴史に関心を持ち、人間の尊厳を大切にしなければなりません。

芸術の使命とは、社会に対して、これが良いことか、良くないことかを知らせることです。映画が直接社会を変化させるということはないかもしれないが、皆さんは不平等社会や全体主義の社会をそのままにせず、変革や変化をもたらさなければならないのです。人間は行動を起こす能力を持っています。芸術というものは大虐殺の後に生き残ったわれわれのために必要なのです。